
恋しま専科？

水樹裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋しま専科？

【Nコード】

N7693B

【作者名】

水樹裕

【あらすじ】

齊藤麻美は、二十七歳の雑誌社に勤めるOL。恋に仕事に充実した毎日を送っていた麻美だったが、恋人が既婚者であることが発覚して！？ちよっぴり大人の仕事&恋の物語。事情により、ただ今更新停滞中です。

01 修羅場と桜と春爛漫（前書き）

今回、恋愛のジャンルに初挑戦です。

勢いで連載を始めてしまった感がありますが、頑張っ更新して行きたいと思います。

『大人の仕事&恋の物語』

宜しければ、お付き合い下さいませ。

ただ今、私生活が多忙の為、更新がストップしています。

余裕ができ次第、更新したいと思えます。申し訳ありません。

> (| |) <

携帯でも閲覧し易いように、改行・行間を多めに取っています。

PC閲覧の場合は、間延びした印象になってしましますが、ご容赦下さいませ。

01 修羅場と桜と春爛漫

「それで？ 私に話って何かしら？」

日曜日。午後三時の喫茶店の店内はがらんとしていて、微かなジャズのBGMがゆったりと流れている。そのBGMをかき消すような、幾分ドスの利いた私の声が、静かな店内に響き渡った。

「ここは、喫茶店『ノアール』。」

二十坪ほどの広さの店内は、ダークブラウンのアンティーク家具で統一されていて、夜は素敵なシヨットバーに変身する。落ち着いた雰囲気と、口ひげがトレードマークのマスターの人柄の良さで、目下、私の一番お気に入りのお店だ。

夜はかなり賑わうけれど、昼間は今ひとつ客足が少ない。まあ、そこが私の気に入っている理由でもある。『仕事の合間に美味しいコーヒーで息抜き』が出来る貴重なお店だから。

でも、いつもならお気に入りのBGMも、今日は、ただでさえ爆発寸前の私を更に苛つかせた。

「お店の一番奥のテーブル席。」

そこに、私、斉藤麻美は、このイライラの原因を作った張本人、元彼の西嶋京介と向かい合って座っていた。

「何だか落ち着かない。落ち着かない原因は何だろうと考えを巡らせる。」

「そうか。服装だ。」

考えてみれば、私たちのデートはいつも決まってアフターファイブ。だから服装は、二人ともスーツ姿だった。

でも休日の今日は、私は、紺のジーパンとシンプルな白のカッターシャツ。髪型も、ラフなアップにしている。京介の方も、紺のスラックスと同系色のシャツと言う格好だ。

可らしい。

普段着姿に違和感を持つ恋人同士なんて……。

思わず、乾いた笑いが込み上げる。

私はジーンズの足を組んで、シオルダーバックからメンソールのタバコを一本取り出し、使い捨てライターで火を付けた。一口深く煙を吸い込み、むせることもなく、ゆっくりと煙を吐き出す。

その様子を見ていた京介の顔に、微かに驚きの表情が浮かんだ。

「タバコ……、吸ったんだ？」

「ええ」

吸ったわよ。吸ったがどうした！

ただ、アンタの前では吸わなかっただけよ。嫌いだって言うていたから。

そうまでしてアンタの好みに合わせようとしていた自分が、いつそいじましくなるわよ。

再び、私はゆっくりと煙を吐き出しながら、テーブルの向こう側

で何かを言いたげに、でも言えないでおどおどしている京介に冷めた視線を向けた。

こんな奴でも、本気で好きだと思った時があったんだ。

京介は、私より三つ年上の三十歳。私が勤めている雑誌社に出入りしている取引先の担当者で、初めて会ったときから気になっていた男。

はつきり言って好きなタイプだった。フィーリングも妙にあって、今までつき合った中では色々な意味で、一番相性が良かったと思う。

細面の顔も、切れ長の鋭さのある目も、薄い唇も、仕事に野心的なところも、みんな好きだった。

もしかしたら、最後の男になるのかも。そう思っていたのに。

一週間前。そんな私の淡い思いは、いとも簡単に崩れ去った。

よくよく考えれば、始めっから変だったコイツの態度。

盛んにモーシヨンいえでんを掛けてくる割には、決して家電いえでんのナンバーは教えてくれなかった。

携帯に掛けても決まって留守電で、電話で話するのはいつもコイツから掛かってきた時だけ。

恋人になって半年も経つのに、既婚者だと他人に忠告されるまで、全く気が付かない私もバカだ。

迂闊うかつだ。迂闊うかつすぎる。

私は、自分の馬鹿さ加減にげんなりしていた。

「約束があるから、早く用件を言ってくれないかしら？ 話が無いなら、帰らせて貰うけど？」

ありもしない約束をでつち上げ、敢えて、感情を押し殺した声で聞いた。私は地声がかなりハスキーだから、我ながら迫力があると感心する。

「別れたくないんだ……」

「はあっ!?!」

ボソリと呟いた京介の声に、ワントーン上がった私の声が被さる。いや、完全にかき消した。

カウンターの奥でマスターがヒゲ面の顔をチラリと上げて、すぐに気にしないと言った風に視線を落とした。

ありがとうマスター。だから、ここを会う場所に指定したんだ。心の中でマスターに礼を言い、私は眉間にシワを寄せて京介の顔をジロリと睨め付けた。

「へえ。じゃ、奥さんと別れるんだ？」

かなり意地の悪い質問をぶつける。

奥さんと別れるはずが無いことは百も承知の質問だから、京介の返事も予想が付いた。

「それは……」

案の定、京介は言い辛そうに口ごもる。

それはそうよね。

逆玉で、親会社の重役の娘と結婚しているのでは、別れられる筈がない。

私は京介が何を言いたいか分かっていた。『奥さんとは別れないが、私とは今まで通り付き合いたい』

とどのつまりが、私に『愛人になれ』と言いたいのだ。

「私、他人ひとの男おとこに興味も感心もないから。都合のいい愛人が欲しいなら、悪いけど他を当たって」

「愛しているんだ」

その言葉に、私はこめかみがピクピクとひく付いた。

愛？ 愛って何？ 独身だと偽って愛人にするって？

「お生憎様ね。あなたが既婚者だと知った瞬間に、私の気持ちは綺麗さっぱり冷めたの。そりゃあもう、絶対零度に凍り付いたわよ。だから、もう二度とこんな風に呼び出したりしないで」

私は、まだ少ししか吸っていないタバコを力一杯灰皿に押しつけて、勢いよく立ち上がった。その勢いに引きずられた椅子が派手な音を立てる。

「麻美、待ってくれ！」

「あっ!?!」

不意に左手を強い力で引かれて、私は小さな悲鳴を上げた。

行かせまいと立ち上がった京介が、私の左手首を掴んだのだと理解する間もなく、バランスを崩してグラリと視界が傾いた。

だめだ、倒れる！　と思った瞬間、京介にがっかりと抱き止められた。

フワリと、馴染なじんだコロんとタバコの匂いが鼻腔をくすぐる。

「な……に、するのよっ。放して！」

体を離そうと身を擦よじるけど、がっかりと掴まれた手は緩む気配がない。私は力で抗うのを諦めて、思いつき睨み付けた。

「悪かった。結婚していた事を黙っていたのは、俺が悪い……。謝るよ。この通り」

そう言っただけ京介は体を離すと、私の両腕を握り頭を下げた。両腕から感じる微かな温もりが、私の中の何かを揺らす。それは心の中で波紋の様に広がり、やがて大きな波に変わって行く。

「ズルい男ね……」

呟く声が、微かに震える。

お願いだから、これ以上惑わさないでよ。

始めから、嫌いで別れる訳じゃない。私の中には京介がついた嘘

に対する嫌悪感と、まだそれと同じくらいの愛情が残っていた。

でも私は、不倫を許せない。許す事が出来ない。

人間には、どうしても譲れないことがあるのよ。

私は、一つゆっくりと深呼吸をして、ギュッと目を瞑った。

ともすればあふれ出てきそうな自分の中の未練を、どうにか封じ込める。

二、三年前の私なら、この未練に流されて愛人と言う名の恋人に甘んじていたかも知れない。でも今の私は違う。伊達に女を二十七年もやってはいない。

「はつきり言わせて貰うわ。私はもうあなたを好きじゃないの。顔も見たくないし、金輪際話こんりんさいしもしたくない。そう言う事だから、さようなら！」

私は、そうきっぱりと言い放ち、尚も何か言いたげな京介の両手を振りほどいて、きびすを返した。

背中に京介の痛いほどの視線を感じながら、私はマスターに極短なお礼とお詫びの言葉を残して精算を済ませ、足早に喫茶店を後にした。

当てもなく、人波をかき分けて歩いて行く。

ああ、本気でめげそう……。

春爛漫。
はるらんまん

街路の桜が、まるで降りしきる雪の様に、ハラハラと儂げにその花びらを舞い散らせている。

振り仰いだ空は憎らしいくらいに澄み渡り、少し強めの暖かい春の風が、頬を伝う物を優しく撫でて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7693b/>

恋しま専科？

2010年10月9日05時25分発行